

第 38 回 評 議 員 会 議 事 録

1. 日 時 2015 年 5 月 27 日 (水) 10 時 30 分～12 時 50 分
2. 場 所 原子力発電環境整備機構 12 階 大会議室
3. 出席者 大江俊昭、児玉敏雄、西川正純、崎田裕子、住田裕子、高橋恭平、
田中裕子、長辻象平、東原紘道、山地憲治 各評議員
評議員会運営規程第 6 条に基づく出席：
近藤駿介理事長、藤洋作副理事長、西塔雅彦専務理事、
梅木博之理事、関浩一理事、安田明彦理事、長谷川直之監事、
鳥井弘之監事
4. 議 題
 <審議事項>
 (1) 2014 事業年度業務実施に対する評価
5. 議事録署名人の指名
 高橋議長より住田評議員、長辻評議員が議事録署名人に指名され了承され
 た。
6. 審議事項
 (1) 2014 事業年度業務実施に対する評価
 ①対話活動に関する評価
 関理事より 2014 年度の対話活動に係る業務実施及び自己評価について説
 明が行われた後、長辻対話活動評価委員会委員長より議題 38-1-1「対話活
 動—2014 年度 業務実施状況に対する評価報告書」の説明が行われた。その
 後、両報告を踏まえ、評議員会としての評価・提言について審議を行った。
 (主な意見等)
 (評議員)
 ・評価報告書に A、B、C という評価があるが、その基準あるいは定義はど
 のようなものか。
 (評議員)
 ・本来は事業活動の目標があつて、その目標に対する達成度合いということ
 による評価を行うものであるが、その目標が明確化されていないところも
 あつたため、感覚的な評価の部分もあるが、試行的に A、B、C といった

評価を行った。評価についてはS～Cで行い、Sは「極めて良い」、Aは「良い」、Bは「ふつう」、Cは「努力を要する」という位置づけで行った。

(評議員)

- ・シンポジウムへの参加者について数字だけが記載されているが、参加者が少なかったことに関して、NUMOはどのように捉えてどのように分析されているのか。今後どのようにされていくのかといった見通しについて教えていただきたい。

(評議員)

- ・対話活動評価委員会としても参加者が全体で定員の6割程度というのはい少ないと感じている。全29会場中、8会場では参加者が30人～40人台にとどまっている。事前告知が不十分であり、評価委員会として新聞、SNSの活用の提言も行ったところだ。参加者が多かった会場については自分のところの近くが最終処分場の候補地になるのではないかという意識を持っておられる住民の方が多かったことが要因と思われる。そういう会場では緊張感があるシンポジウムとなっていた印象を受けた。それ以外では説明に理解はしてくれるが、他人事の空気が感じられたと仰っていた評価委員の方もおられた。

(NUMO)

- ・NUMOとしても定員の6割という参加者は少なかったと感じており、問題意識を持っている。新聞など、事前告知が限られた範囲で行うことしかできなかったことは反省しており、今年は先週から国と共催でシンポジウムを開催しているが、メディアを通じての広報・告知の仕方について改善策を講じたところ。

(評議員)

- ・参加者が少ないのは、広報の問題だけでなく、地層処分事業のシンポジウム等に出席すると地層処分事業に関心があるのではないかと世の中から思われることを懸念して、出席を遠慮される方もいると思われる。マスコミ広報だけでなく、地域の方に内容に踏み込んだ、正確な情報提供を行う努力が必要であると感じている。

(評議員)

- ・ある会場では、火山の多い地元には最終処分場は来ないであろうと思っていたシンポジウムの参加者が自分のところにも処分場の候補となる可能性があることがわかって、会場の雰囲気が変わった。一般の方に自分事として考えていただくためには、切迫感といったものを感じさせることも効果的ではないかと思った。評価委員会が評価された内容に関してはその通りだと思う。改善点としては、事前の準備が十分できていたかどうか。全国30都市での開催に拘り過ぎて、粗製濫造となってしまっていたのではないかという気がしないではない。一方で良かった点としては、10代の参加者が多かったこと、パネルディスカッションに大学生を加えたことは、これまでのシンポジウムではなかったことであり、希望を持つことができた。また、会場では時間で質問を切ることもなく、最後の質問者までお答えするというNUMOの姿勢は好感を持たれたのではないか。シンポジウムのアンケート結果を見ると、8割ぐらいの方が来て良かったということであったので、そういう前向きな評価もあって良かったのではと思う。努力はされているが、一般の方には内容的にはまだ難しい部分もあると思う。用語集を作るのもよし、キャニスター模型を用意するのもよし、3Dの映像を用意するのもよし、改善するところはまだまだあるが、希望を持つことができる内容であったと思う。

(評議員)

- ・評価制度は難しい。評価する側として、その場面に遭遇していなければ、NUMOからもらったペーパーでの評価となり、なかなか難しい。評価制度は非常に良い制度だと思うが、どのように評価して、次の活動に結び付けていくというその橋渡しが難しいのではないかというのが最初の印象。参加者が少ないという評価であったが、最終処分事業という、あまり関心を引かない内容で多く集まったほうだという評価もあるのではないか。主催者としては参加者をより多く集めることが重要なのであろうが、数は少なくとも初めて参加される方とか、やや慎重な意見の方でも距離をより縮めることができたかということが重要であって、参加者を多くすることだけを最優先にはしてはいけない。NUMOが説明している内容はもっと目線を下げて、NUMOとは何だ、地層処分事業とは何だともう少し柔らかくした語りかけのような説明内容のほうがシンポジウムの性格に即しているのではないかと思った。全国29か所という規模でよく実施したと思う。

内容はさておき、成し遂げたことは大いに評価すべきであると思う。自信を持って取り組んでほしい。

(NUMO)

- ・示唆に富んだ意見に感謝。シンポジウムの内容に関しては多くの方に認識いただくことが重要と思う。構成等についても改善すべき点は多々あると思っている。NUMOは、国と共催で5月23日から約1か月全国9都市でシンポジウムを実施する予定であるが、7月以降に20回程度、全国で大小規模の説明会の開催を検討中である。いただいたご意見を反映できるか内容を検討したうえで、より良いシンポジウムを実施したいと思っている。

(評議員)

- ・現場の感覚がないため評価が難しいのではないかというご意見があったが、評価委員会のメンバーはシンポジウムのコーディネーターを担っていたり、私自身も過去登壇したこともあり、現場の感覚は掴んでいると思っている。参加者数の問題はあったものの、シンポジウムを29回実施したことは評価できる。

(評議員)

- ・評価委員会がまとめられた評価報告書の内容についてはごもっともであると思っている。そのうえで、NUMOの事業は電気料金から拠出されるものであり、それほど潤沢な資金があるわけではない。シンポジウムについてももっと厳しく費用対効果を考える段階になってきていると思う。全国に網を掛けるようなやり方で漫然と広報をするのではなく、国が有望地を公表するのであれば、そういう地域に対し重点的に実施すべきである。戦略を持って有効に対話活動を実施してもらいたい。また、内製化にも努め、安上がりで意味のある、届くような広報活動を目指してもらいたい。

(評議員)

- ・今後、適地の公表の前と後で、全国に対してどうするのか、関心のある地域に対してどうするのか戦略的な広報の立て方を検討すべき。文献調査に入る前と後でどうするのか。NUMO内部では既にあるのかもしれないが、それを事業活動に織り込んでいただきたいと思う。処分事業の見直しの中で、文献調査に入ったところでは「対話の場」を設置することになるが、

「対話の場」をどのように作っていくのか流れが重要。対話の場を設置する以前に、先行して地域の人とはどのように対話するのか。また、事業計画では、機構の職員自らが説明するということが記載されていたが、NUMOの自己評価や評価委員会の評価報告書に記載されていない。対話活動を行う方がどのような研修を受けているのかといったことも重要。今後、地域に入っていく際には重要な視点である。東京のシンポジウムを拝見したが、会場から質疑を受ける姿勢は重要であり、終了時間を過ぎても「質問のある方は残ってください」という姿勢は非常に良かった。参加者の方にNUMOも変わったという印象を与えていた。今後も継続して行っていたらと思う。

(評議員)

- ・効果的な広報を目指せというご指摘だが、評価委員会においても、有望地公表後の広報のあり方について議論があった。NUMOの広報活動もその有望地に集中することになると思われる。一方で、当該地域に対する風評被害等も予想されるため、かえって全国広報を実施することは重要であるという意見があった。

(評議員)

- ・評価委員会の報告書では、「NUMOが地域の発展に協力する視点も備えていることを強調すべき」とあり、私も重要であると思っているが、NUMOがそれを行えることを裏付ける根拠があるのか、あるいは役割を与えられているのか。地域の発展に寄与するという当事者になり得るのか。

(NUMO)

- ・地域の発展に資する活動を拠出金でどこまでできるのかというご質問と思われる。NUMOの職員がその地域で安定した生活を送るため、必要な処置を行うことはNUMOの責任の範囲であると思う。それを越えての地域の発展に寄与するための方策は色々あると思われるが、東京電力が「ビレッジ」を造って地域に貢献するようなことはNUMOはできないと思っている。それは廃棄物の発生者である電気事業者が担うことかもしれない。あるいはこの事業は公益事業であるので、国として地域に対して感謝するという観点から何らかのベネフィットを提供すべきという議論もあると思う。

(評議員)

- ・評価をするためには、事業活動が明確となっていて、その活動の狙いが具体的である必要がある。そうではないため、評議員の皆さんから多くの幅広い意見が出て評価が難しくなっている。今、この段階で具体的にレベルを上げなければ、NUMOが要求されているものに合っていないのではないかという意見もあった。事業活動をどのように戦略的に行っていくかを検討することが必要と思われる。

②技術開発に関する評価

梅木理事より 2014 年度の技術開発に係る業務実施及び自己評価について説明が行われた後、東原技術開発評価委員会委員長より議題 38-1-3「技術開発—2014 年度 業務実施状況に対する評価報告書」の説明が行われた。その後、両報告を踏まえ、評議員会としての評価・提言について審議を行った。

(主な意見等)

(評議員)

- ・長辻評議員から報告のあった「対話活動」は単年度活動の評価であったが、「技術開発」では報告の性質が異なり、今までやってきた活動の上に最新の状況を加えて評価するものである。限られた時間で膨大な資料を見る必要があった。評価報告書については、将来ホームページで公開されることになり、一般の目に触れるという観点から、逆に慎重派の方が読まれた時にも評価が厳正に行われていることをアピールできるものとしたという考え方があつた。NUMOに対しては、「受け身の姿勢になるな」、「後手に回るようなことがあつてはならない」、「リスク材料も提供して信頼を得るべし」といった、対話活動評価委員会の報告と共通するような意見があつたように思われる。評価報告書は、委員会が問題にする場合にはその根拠を示し、併せて提案として、今後進むべきと考える方向性を示した。有望地選定から文献調査、概要調査と段階を経ていくが、それほど時間的な猶予はないと思っている。科学的有望地が公表され、自分の地域が候補地に入っていれば、すぐに問い合わせがあるだろう。その時に技術陣もきちんと説明できなければならなくなる。こうした対応への準備は事前に十分やっているべきという危機意識があり、それを反映した内容となっており、現在の危機感を表明している。

(評議員)

- ・委員長が纏めた内容に概ね同意している。特に強調したいのは、手引書のようなものが順調に作成されているとあるが、NUMOの場合、安全戦略に基づいた計画があり、それに則って着々と進めているということであり、単年度だけで見るとはつきり分からない。技術的な観点からは着々と進捗していることになるが、単年度で評価するのは難しい。
- ・対話活動評価委員会の報告と同じ文言ではあるが、技術開発においても訓練としての「シミュレーションをすべき」という必要性を感じている。自治体から問い合わせがあった時に手引書を見ながら、本番の対応が出来るとは思えない。これは大多数の委員の意見である。今後の活動として強調したい。技術的には計画通りに進んでいるが、だからと言って実施が出来るかと言うと、それは別問題であることを忘れてはならない。

(評議員)

- ・科学的有望地が公表されれば、訴訟が提起されることもあり得る。「リスクゼロでなくてはならない」と考える裁判官も現実に存在する。この10年間、自然科学技術面でのさまざまな研究と準備をされてこられたであろうが、リスクに対してどう考えるか、他のリスクと比べてどうなのか、国民だけでなく、裁判官を説得できるだけの科学的な根拠のみならず、社会思想的・哲学的な理論構築が必要な段階となっているのではないか。

(評議員)

- ・科学的有望地の公表について、技術WGでは「適地は定性的には言えるが定量的に言えない」となっている。適地のイメージは、どういうふうに公表すると、世の中の誰もが理解して、自分のこととして考えていくことができるかが重要であると考え。色々なケースや様々なシミュレーションを行っているNUMOが国と意見交換し、どうやったら社会が話し合っていくのか、分かり易い情報を出して良いのではと思う。

(評議員)

- ・その重要性は考えている。「大まかなイメージを持っておく必要がある。それは出来ない相談だろうか。」と記した。科学的有望地の公表前に調査から設計・建設・操業、閉鎖までのシミュレーションをして目安となるイ

メージを作っておく必要がある、と考える。

(NUMO)

- ・適地論については、技術WGの基本的なスタンスとして、要件（リクワイアメント）を決めることは出来る。その上で、一般的に階層化して、地図に当てはめるべきであるが、地点をランク付けすることはしたくないようである。海外の議論とは異なるように思う。

(NUMO)

- ・技術的・社会的・経済的要件を踏まえて、全体的に議論をする際、NUMOの保有する関連した技術資料・情報を全部提供して、これを行いたいというのが、国側のスタンス。オブザーバーであるNUMO側から有望地がどこかと言うことを求められているのではなく、有望地の選定はあくまで国がWGを通じて行うということである。

現在のNUMOの最優先事項は包括的技術報告書を完成させること。日本で考えられる地層を忠実に捉え、これをできるだけ、どのように設計・安全評価に結び付けるかという一連の作業内容を纏めてこの1年の間でお示しする。その中で例えば花崗岩だけを取り上げるのではなく、想定される地質環境を平等に取り上げていく。これらを対象とし、この報告書を作成するなかで、ご指摘のような実践的な効果も考えシミュレーションを行っていききたい。

(評議員)

- ・厳しい内容であるが、論点は適切であると考え。ただし、指摘がたくさんあるので表現を含めて整理しなければ使い難いだろう。安全性は信頼性の問題。NUMOの技術系職員による信頼性の検証ということについて、説明能力を向上させれば良いのかと言えば、それだけではなく、技術の内容を地道に改善していく必要がある。原子力系の分野の場だけでの発表だけではなく、地層処分に反対という考えを持つ専門家が比較的多くいるであろう、地質や地盤、水理といった分野の学会で積極的に発表することも必要ではないか。異分野の専門家と対話して信頼を高める努力をしなければシミュレーションだけでは信頼は得られない。異分野の専門家にも納得できる結果を纏めれば、客観的な評価を得られ、NUMOは変わっていくことができるのではないか。

(評議員)

- ・評価委員長から「解析コードの品質管理の重要性」について指摘があった。解析コードを利用する場合はそのコードに対して品質管理が重要。原子力安全の世界では、使用されているツールやコードが適切であるかが安全性の出発点となっている。後で手戻りにならないように今の時点でしっかり対応する必要がある。手順通りに仕事が出来ているか、品質管理的な視点でシステム化する必要があると考える。

(評議員)

- ・委員長からのこの指摘について、NUMO側はどう考えるのか。

(NUMO)

- ・解析コードの品質管理は非常に重要と認識しており、コードを採用する場合、まず使われて実績のあるコードを導入している。独自に開発しているものは検証を進めながら品質管理には注意している。こうした検証を行った結果もあるので、うまくまとめて説明できるようにしておきたい。

(評議員)

- ・コードの検証についてはヒアリングの時に準備がしてなかったため、いきなり聞かれて答えられなかっただけだと思うが、それでもやはり不十分に感じる。即座に答えられるように、しっかり事前準備しておく必要がある。

(評議員)

- ・評価については非常にしっかりやっている印象。職員による十分なシミュレーションとそれを発信する能力について、しっかり書き込みいただきたい。一つ気になるのは地下環境や操業中の安全確保はあるが、環境影響評価の項目はない。科学的な環境と社会環境。この事業が進むと大変強い関心を持たれると思う。社会からの関心に対し答えていく必要がある。

(評議員)

- ・NUMOの技術研究の進捗がなかなか外部に伝わって来ない。メディアの科学部記者に向けて勉強会を開催すれば、喜ばれると思う。そういうことをやっていただきたいと思う。

(評議員)

- ・日本の技術に対する信頼性について知らせていただきたいと思う。

(NUMO)

- ・技術的成果について学会や国際会議で発表したことについては、全てNUMOのホームページに掲載している。ただ、こうした事実についてのお知らせが上手くいってないと思う。勉強会については検討したいと思う。

③組織運営に関する評価

西塔専務理事から2014年度の組織運営に係る業務実施及び議題38-1-4「組織運営—2014年度業務実施状況に対する評価報告書」及び自己評価について説明が行われた。その後、評議員会としての評価・提言について審議を行った。

(主な意見等)

(評議員)

- ・評議員会の位置づけを変えて、民間企業における監査、報酬、指名の三委員会の機能を評議員会に担わせることとしたということであれば、それを真に実効ある仕組みとするためには、評議員会の開催回数を増やすことも検討すべきではないか。

(評議員)

- ・評議員の皆さまのスケジュール的な問題もあり、ご意見として伺っておく。

(評議員)

- ・昨年度、情報公開請求の実績は1件ということであるが、NUMOとしてはもっと多くあるものと想定していたのか教えていただきたい。

(NUMO)

- ・NUMOとしても請求1件というのは例年と比較しても少ないと思っている。今後は処分事業に対する関心も高まり、情報公開請求の件数も増加するものと思われる。

(評議員)

- ・コミュニケーショントレーニングなどの研修は職員全員対象が基本である。

(評議員)

- ・通常なら事業計画として、有望地の選定があった時にどれぐらいの費用が掛かり、何年間掛けて活動を行うといった、長期、中期の事業計画を作るべきだと思う。広報活動に関しても、活動ありきではなく、事業計画に併せた、絞った形での広報活動を行うべきであり、それに対する評議員会の評価があると思っている。その全体の構成が見えていない。形態としても評価対象が見えていない印象がある。

(評議員)

- ・理事長は昨年就任され、それまで外部で見えていた印象と当事者として携わっている印象とでどのように感じておられるのか。どのような心境を持っておられるのか。今年は色々と動き出す過渡期であるが、それに対する覚悟を教えていただきたい。

(NUMO)

- ・NUMOの使命は公募の手続きの中で自治体から手を挙げていただくのを待つというものであり、原子力委員会としては、形は美しいがフィージビリティは必ずしも高くない。どうするのかな、もっと語りかけなくてはという印象を持っていた。また、地層処分事業を地域の活性化の材料として皆さまに考えていただくためには、国と連携して取り組んでいかねばならないということは以前から言っていた。3.11以降、あらゆる動きが止まっており、国が前面に出る以外ないと思っていたが、国が問題意識を持って、状況の改善に取り組んだ結果として少しずつ進展しているような状況になっている。海外を見れば、地層処分事業が国の事業として整理されているところもあれば、電気事業者の事業として整理されているところもある。日本はどのように整理するかといった議論が足りないと感じている。いずれにせよ、NUMOは法律で定められた実施主体であり、実施できること、すべきことを国に提案し、自ら積極的に進めていかねばならないと考えている。

(評議員)

- ・今後、評議員会による評価、提言を行うという流れになっているが、本日も多数の御意見が出ており、まとめることは難しいと思われる。ご意見をまとめずに、並列表記していただければどうか。それで次年度の事業活動に活用していただくためのたたき台にしていただくということによろしいか。文書の内容については事務局と調整させていただく。次回の評議員会まで日程的には厳しいが、よろしくご協力をお願いします。そのうえで、次回の評議員会で「評価報告書」として取りまとめをしたいと思う。

(一同)

- ・異議なし。

上記議事の経過およびその結果を記録するため、本議事録を作成し、議長および議長が指名した議事録署名人がこれに署名押印する。

原子力発電環境整備機構
評議員会

議 長 高橋 恭平 ①

議事録署名人 住田 裕子 ①

議事録署名人 長辻 象平 ①